



◎沿革

臥雲山即宗院は、薩摩藩（現・鹿児島県）東福寺城の守護大名であった六代目島津氏久（1328–1387）の菩提のため、南北朝元中4年（北朝嘉慶元年=1387）、剛中玄柔和尚（東福寺第五十四世住持）を開基として創建された。院号は氏久の法名「齡岳玄久即宗院」に由来する。永祿12年（1569）に焼失したが、慶長18年（1613）島津家久によって再興された。以来、薩摩藩の畿内菩提所とされ、藩より七十石が施入されるほど深い関係が結ばれてきた。現山門は再興時のもので、門の左右に安置された仁王像は石造りで、本山塔頭寺院の山門仁王としては稀有な存在である。

◎開山

開山剛中玄柔和尚（1318–1388）は薩摩藩主の猶子（養子）として豊後国（現・大分県）に生まれた。東福寺住持第三世大明國師（南禪寺の開山）の法嗣玉山玄提に師事し、その法を継承したのちは大慈寺（鹿児島県）・南禪寺・東福寺に歴住した。その間中国の元に渡り、6年間仏教と儒学を学び、朱子学の権威となつた。また帰朝時には大藏經を請來し、本院に寄付した。嘉慶2年5月27日、世寿71歳で入寂した。



山門の仁王像

Statues of Niō (guardian gods) at the San-mon gate
山門仁王像 산문을 지키는 인왕상

交通：JR奈良線・京阪本線「東福寺」下車徒歩10分、京都駅バス「東福寺」下車徒歩10分
〒605-0981 京都市東山区本町15丁目 TEL/FAX (075) 561-9200

臥雲山即宗院

霧消茶 東福寺派

臥雲山即宗院は、1387年に創建された薩摩藩の菩提所です。この寺院は、薩摩藩の守護大名である島津氏久の菩提として建立されました。島津氏久は、南北朝時代の豪傑として知られています。彼の死後、剛中玄柔和尚が開基となりました。この寺院は、薩摩藩の重要な菩提所として、藩の施入を受けながら、長い歴史を経てきました。現在は、美しい日本庭園や古刹の佇まいが楽しめます。

この寺院は、多くの歴史的・文化的価値を持っています。特に、その尼寺としての歴史は、豊かな歴史を物語っています。また、境内には、多くの古刹や石碑があり、その歴史的背景を理解する上で重要な役割を果たします。また、境内には、多くの古刹や石碑があり、その歴史的背景を理解する上で重要な役割を果たします。

The history of Gauanzan Sōkushū-in dates back to 1387 when it was founded as a Buddhist temple for the deceased daimyo of Satsuma, Ōshū-no-kami. The temple was established by Gauanzan Sōkushū-in, a former member of the Tokugawa family who served as an advisor to Emperor Go-Kōgon. The temple's name, "Gauanzan," is derived from the Chinese characters for "cloudy mountain." The temple's architecture and decorations reflect the rich cultural heritage of the region.

古今文庫

臥雲山即宗院

Gauanzan Sōkushū-in



臥雲山
即宗院

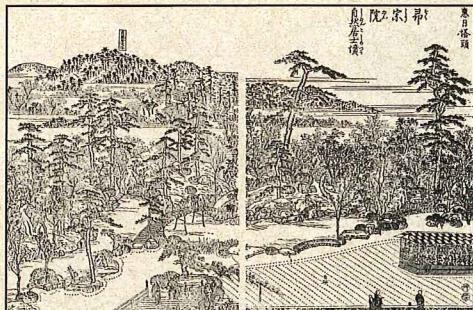
Sokusyū-in Temple



月輪殿

平安時代後期、関白藤原忠道（近衛家）はこの地に御所の東御堂を建立した。忠道の子、公家九條家の始祖である兼実は、建久7年（1196）に關白を辞して後、自身が別称「月輪殿」と呼ばれたことにちなみ、山荘「月輪殿」とした。本院庭園はその跡地である。太平洋戦争後荒廃したが、玄之和尚が復興に心血を注ぎ、昭和52年に庭園文化研究所森蘊博士（元東大教授）等の指導で往時の面影が復元され、京都市史跡に指定された。

室町時代後期の庭園としては類い稀な公家寝殿造系で、鈎の手（「心」）になつた池の地割り・瀧の位置など、その往時が偲ばれる。



都林泉名所図絵（1799年刊行）

Miyako rinsen meishozue (Illustrations of Gardens and Famous Places of Kyoto-1799)
都林泉名所圖繪（1799年刊行） 교토 임천 명소 그림 지도 (都林泉名所圖繪) (1799년 간행)

『法然上人絵伝』卷八段五（国宝・知恩院蔵）に描かれている。絵伝には“頭光”を冠した法然上人が橋上に描かれ、上人が藤原兼実に法話を行った真正な聖地であることが窺われる。寛政11年（1799）に刊行された『都林泉名所図絵』に掲載され、江戸時代にも名庭園として名高かったといえる。雄大深遠な自然は山内塔頭随一で、「紅葉と苔」の美しさには定評がある。四季折々の花木は尽きないが、冬には“値千金”的「千両」の実が、凜とした厳しい寒さの中に色を添えている。

国宝 法然上人絵伝 卷八段五（知恩院蔵）

Hōnen Shōrin eden (scroll painting - Chion-in, 14th Century, national treasure)
法然上人繪傳（國寶 知恩院藏。十四世紀） 국보 호넨쇼닌 그림 전기(法然上人繪伝) (치오잉 소장, 14세기)
浄土宗の開祖法然の誕生に始まる半生の伝記、浄土宗確立の過程、
法然の教えなどを絵巻にして説いたもので、四十八巻からなる。



西郷南州隆盛公

明治維新の際、西郷隆盛公と月照上人（京都清水寺の勤皇僧）が当院境内奥地の茶亭「採薪亭」に隠れ、幕軍の難を逃れつつ幕府転覆の策を謀り、ここより密令を発して諸藩と連携のもとに維新の大業を完遂した。採薪亭は現存しないが、寛政8年（1796）当院第十三世龍河和尚が、ここを閑居の庵とした自然居士（1200年代・觀阿弥作能楽のモデル）を偲び一字の草庵を建てたことに始まる。建物は方三間、二階建、階上には「雲居」の額を掲げ、階下を「採薪亭」と名付け、もっぱら茶室として使用された。狐狸が闊歩する東山三十六峰のひとつ「慧日山」の裾野にあり、新撰組や幕府の追っ手を逃れ謀議するには格好の隠れ處であった。

隆盛公は、慶応4年（1868）の鳥羽伏見の戦に際しては、当地に薩摩軍の屯営を構え、本院の裏山山頂に砲列を敷き、淀より進む幕軍に向かって砲撃をくわえ、勝利を手中にした。倒幕後、隆盛公は明治維新で戦死した靈を供養するため斎戒沐浴し、524靈の揮毫をおこない、明治2年に「東征戦亡の碑」を建立した。明治維新の歴史に登場する「生麦事件」の奈良原喜左衛門、幕末の「人切り新兵衛」こと田中新兵衛（雄平）の墓碑が存在する。

西郷隆盛自筆による薩摩藩士東征戦亡之碑

Gavestone by Saigō Takamori

西郷隆盛自筆石碑 사이고 다카모리 자필의 돌비석



赤千両

Red coral berries
紅色草珊瑚



黄千両

Yellow coral berries
黃色草珊瑚